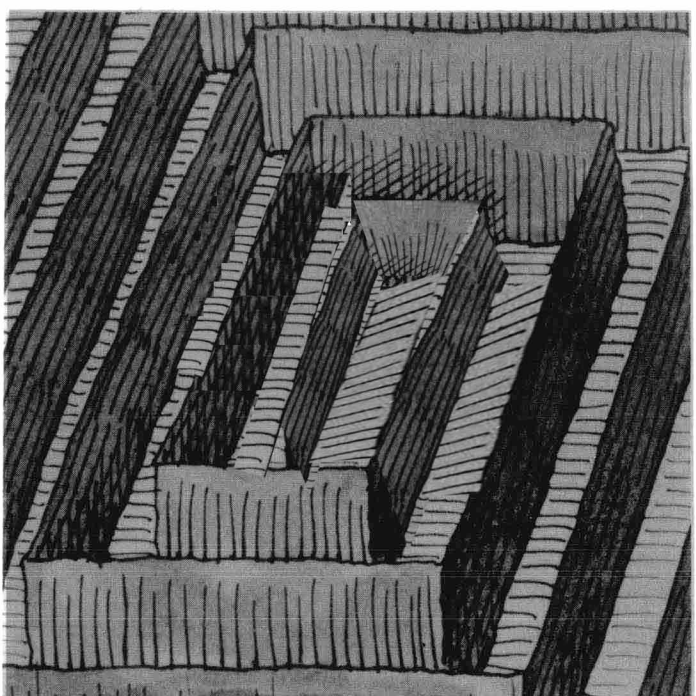
プロレタリア哀愁劇場

揚野　浩

プロレタリア哀愁劇場

揚野 浩

光風社書店版



プロレタリア哀愁劇場

★定価はカバーに入っています

《検印省略》

著者　揚野　浩
発行者　豊島　澂
印刷者　菅生定祥

発行所　株式会社　光風社書店
東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京(291)〇二三八番
振替東京一二九一三番

落丁・乱丁はお取替いたします。

目次

人生漫画　3
ゲリラの棲む岸壁　37
F4ファントムジェット機を降ろせ　75
プロレタリア競艇哀話　117
プロレタリア蟻地獄渡世　155
プロレタリア哀愁劇場　213
あとがき　261

装

幀

山

崎

英

介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

人生漫画

その日、私はトレーラを運転していた。助手席には川路という男が乗っていた。トレーラは最大積載量が二〇トンなのに、四五トンの鉄筋を満載していた。

そのため車は走らずハンドルもクラッチも重かった。

私はエア・ブレーキのエアが抜ききらず、ブレーキが掛かったまま走っているのではないかと思い、一度は運転席から降りてブレーキ・チャンバーを点検した程だった。

しかし、どこにも異常はなかった。敢えていうなら不貞腐れたみたいにタイヤがひしゃげていた。一メートル直径のタイヤが十八本もひしゃげているのである。壮観だった。

ひしゃげたタイヤをエンジンが、ゴオーン、ゴオーンと悲痛な音をたてて廻した。

ちょっとした坂道になると眼にみえてスピードが落ち、イライラした後続の車からクラクションを鳴らされた。

私は一日中、ハチマキを締め、――イヤイヤしている断末魔のトレーラを「この野郎、走らねえか！」と叱咤、激励し、日給千八百円だった。

余りいい商売とはいえなかった。

曲り角では他の車を全部、ストップさせる必要があり、ドライバー達が注目する中を威風堂々？とゆっくり曲ってゆくのである。そんなときは両手で顔を隠したい気持がした。

大体、トレーラに積む荷物というのが、ブルドーザーやショベル・クレッパーなどの重機類——鉄筋などは、犬が吼えるぐらい積むのだった。重機を運ぶときは電線を切る心配があり、前後左右ならまだしも、上まで用心しないと国鉄の陸橋ぐらい壊しかねない。私は地元、国道3号線或いは九州の主幹道路にかかる陸橋の高さはほとんど覚えている。重機を運ぶより鉄筋の方がましだ。

今日は、大牟田の三井三池製作所まで鉄筋を運ぶのである。鉄筋は今朝、博多港で神戸から来た貨物船のドテッ腹からクレーンで吊りあげ、そのまま旋回して、トレーラに積み込んで来た。

鉄筋の長さはほぼ、西鉄市内電車ぐらいはある。当然トレーラ自体は西鉄市内電車より長く、揺れがひどく胃をこわすイヤな車だった。

博多駅の南側から国道3号線に乗り入れると次々に追い越された。

追い越される度に「腹がたつなあ」と川路がいった。国道3号線は長トラ、砂利トラ、乗用車が追いつ追われつ、——若い女を乗せた乗用車の窓から罐ビールが投げ捨てられ、その空罐を狙ってわざわざ轢いてゆく馬鹿なトラックがあり、私の額には汗がでていた。

「バックにダンプ一台」

助手席の川路がいまいましそうにいった。追い越しをかける黄色いダンプがバックミラーに映っていた。

「こうすれば――」

私はデコンプレッション・レバーを引いた。シリンダーにしこたま燃料をため、満を持して構えていると、何も知らないダンプはトレーラの排気音があるあたりまで地響をたてて近寄って来た。

私はレバーを放した。

一瞬、――黒色火薬を爆発させたような音がして、ダンプは黒煙に包まれ、川路が振り返って、「運転手が犬みたいにハアハア言ってる」といった。

私は腹をゆすって笑った。

トレーラはゴオーン、ゴットン。ゴオーン、ゴットン。

貨物列車のような揺れもどしがあり、揺れるたびに鉄筋がシャン、シャン鳴った。

私がコオーリャ、ハイハイッと掛声をかけてハンドルをまわすと、後続の何本かのタイヤと、タイヤを取付けた台車と、その上に満載した鉄筋がぞろぞろついてくる。

がっかりして、醜女の深情けという言葉を思わせた。

川路と二人笑いころげていると、黒煙を浴びたダンプが鮫のように追い抜いていった。ダンプのバックミラーが春の日射しをあびて、キラキラ光り、運転手は青ざめた不健康な顔にサングラスを

かけていた。
「可哀そうにノルマに追われている」と川路がいった。
ダンプのボディには鉱滓バラス、内村建設と書いてあった。どこの現場へ運ぶのだろうか。鉱滓バラスは水気の多い埋立地にむいていた。普通一回運べば百五十円にはなる。現場までの距離によって違うけれども、大体百五十円が相場なのだ。
「俺達もノルマに追われているさ」と私はいった。
「だけど時間仕事の日給だから」
「日給でも生きていくためのノルマだ。病気でもしてみンか――」
私は国道3号線沿いの松の木を指さし、
「あの松の枝ぶりなら丁度いい」といった。
川路はチラッと視線を飛ばし、なるほど、優雅で気品がある、と相槌をうった。
首を括る話の冗談である。
「あんたは、かあちゃんの分まで松の木がいるな」
川路は私と同じ二十三歳だったが、可愛らしい妻がいた。十九のとき結婚したという。尤も結婚式は挙げていなかった。金が溜ったら華々しく結婚式をあげるとはいっていたが、金が溜るということは不可能に近いらしかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「結婚式など、美空ひばりさんや皇太子さんらがするのだわ」といっていた。

そんなときの川路は、やるせない遠くのものを見る眼つきだったから或いは、華々しい結婚式のことで夫婦喧嘩したこと位はあったのだろう。

彼は二月二十八日からうちの社員になった。社員といっても別に入社試験を受けた訳でも、うち、――「笠組株式会社」が運転手を募集していたという訳でもない。

相川運輸の長距離トラックに乗っていた川路が、「笠組」と書いたレッカーと並んで信号待ちの際、「あんたの所、いくらくれる」と尋ね、その翌日はもう相川運輸の前を素通りして、笠組の事務所に姿を見せている。金のためなら愛社精神もへったくれもないのである。当節は、大型自動車の運転手はどこでも不足しており、まして川路ときたら七つの免許証を持っていた。免許の種類もあればあるものである。

川路が笠組の社員になって五日目、私が二十七日目である。お前らは同じ年頃だから一緒に乗れと、社長がいって私達はペアを組んだ。

真昼の3号線をライトを点けて走ってくる対向車があった。黒塗りの乗用車だった。

職業運転手以外のドライバーは、――あの、ド阿呆――と思うに違いない。ところが違うのだ。

乗用車はトレーラとすれ違う際、チカチカとライトでウインクしていった。ライトの点滅はねずみとりがいるぞよと教えていた。

それなのに猛スピードで追い越してゆく赤いスポーツカーがあった。揃いの黄色いネッカチーフをなびかせたアベックが乗っており、特に女は私達に片手をあげて微笑して行った。
雑誌のグラビアからぬけてきたみたいに颯爽としていたが、
「あの馬鹿！」と私はいった。
私達は、周囲に気を配り注意して走った。ねずみとりに捕まったら一週間はタダ働きになる。
「いるいる、いい気味だ」と川路がいった。
川村金属工業のブロック壁が切れた所に空地があり、ねずみ取りが隠れていた。オートバイ、軽四輪、トラックを次々に捕えて免許証を調べていた。先程のスポーツカーの若者はしけた顔をして、交通違反の赤紙に署名していた。
ねずみ取りこと、交通の警官がトレーラを見あげて鋭く笛を鳴らし、停車のゼスチュアをした。こっちも他人事じゃない。重量違反なのだから。私はブレーキを踏みながら、
「心配するな、速度違反じゃない」といった。
「アハハ、積載違反だからな、しかし総重量は五〇トンを越えるぜ、そんなカンカン（計量器）まで据えているだろうか？」
「据えていたとしても計量はすまい、壊されるからな」
私はエンジンを止めサイドブレーキを引いた。

「降りて来んの」
筑後訛りの若い警官だった。
「うちらは、いつも法規を守って走っているンですが、何か事件ですか？」と川路がいった。
「いや、事件じゃなか、えろう鉄筋ば積んどるじゃンの、免許証」
川路がわざと免許証を出した。
「あんたじゃなか、そっちたい」
「ああ私ですか」
「あんたが運転しちょったろうもん」
私はニタニタ笑っていた。警官は私達よりはるかにあどけない顔をしていた。定年退職まで逃げきる人相だと私は思った。
「何トン積んでいる？」
「さあ――」と私は、俺達はタダの運転手だから、そんなむずかしいことを聞かれても困るなあ、――博多の事務所までいったら解るけど、今から鉄筋を一本一本かかえて計る訳にもゆかんし、なあ、おいと言った。
「伝票があろうもン」
川路が右のポケットから「送り状」を出した。会社は送り状を二つくれる。一枚は警察官用であ

る。

「二トン半ほど重量オーバしている」

送り状をみて警官は安心したように言った。もともと五トンまでは黙認してくれるのを、知った上で作成した送り状なのだから会社も抜け目はない。二〇トンでは具合が悪いのでわざと二トン半オーバーして書いている。この二トン半が曲者なのだ。

「そうですか、二、三本積み過ぎたンだなあ」と川路は鉄筋の山をみて嘆息するように言った。川路は流石に慣れている。

警官が持っている送り状を逆にのぞきこんで、

「うちらは、こんな書類みたらアタマが痛くなるンですよ、二トン半のオーバーになっていますか、済みません」とペコペコしている。私はそっぽをむいていた。

何が二トン半の重量オーバーか。実際は二五トンもオーバーしているのだ。

川路に余り警官をおだてたり、まつわりついたりし過ぎて逆に叱られている。

「あんたが運転手じゃあなかじゃんの」

「なかじゃんのって、俺達はいつでもここらで交代するんだ。なんなら俺の免許証をみるかね」と川路は突然高飛車に出た。

「もういい、用心して行け」

警官は精一杯の虚勢を張って言った。
なりゆき上、川路が運転手になり、私が助手席に座った。二人で、キャッキャッ笑った。余り笑うのでトレーラが蛇行し、3号線のアスファルトから田んぼへ墜落しそうになった。
川路はコリャ、コリャと掛声をかけてトレーラを伸ばした。
「若し、田んぼに突込んだらどうする？」
「あんたは？」
逆に川路が尋ねた。
「さあね、レッカーでもあがらないよ」
「俺はまだ、履歴書も出していないし、そうだな」
春風が筑紫平野をざわざわと青麦をなぎ倒して、どこまででも吹き渡っている。
青麦のあいだを、眠たくなるような色あいで菜の花畑が点綴しており、春がすみの彼方からオレンジ色のジーゼルカーが走って来た。童謡でも歌いたくなるような景色だ。
——お昼のニュースをお伝えします——
聞くともなく、カー・ラジオを聞いていると、
——けさ、福岡市で居眠り運転のダンプカーが、登校中の児童の列に突込み、二人の児童が即死するという事故がありました。けさ八時十分頃、福岡市東油山町の県道で川井与三郎、二十三歳の

運転するダンプカーが――

「与三郎さんの免許証はパアーだな」と川路はいった。

私もそう思った。二人も殺せばちょっと助からない。

「若し、トレーラが田んぼに突込んだら――」

川路はオレンジ色のジーゼルカーをみて、

「面倒くさいから、俺は汽車に乗って帰るよ、与三郎さんの代りにダンプでも運転するか」というのだった。彼にとって、暴走ダンプのニュースは就職口を教えてくれたようなものである。

「与三郎さんの会社は潰(つぶ)れるだろうな」と私は言った。

「株式会社は他にもあるさ、俺は七つの免許証を持っているのだから」

「しかし、年を喰ってからも車に乗るのは、傍目(はため)にも哀れなものだ」

私は何気なくそう言った。そうは言ったものの自分だって先のことを真剣に考えている訳ではなかった。たぶん明日は「笠組」に出勤するだろうが、いつの日かの明日は解らない。いままでの生活がタイヤのようにくるくる廻って定着していなかったのだから、明日のこと、十年先のこと――

「まあ、どうにかならあ、メシを喰おうか」と私は言った。

船小屋という小な温泉町へ入る国道209号線沿いのドライブインで私は皿うどんとメシを注文した。川路は風呂敷包みから弁当箱を取り出していた。私は中身を見るともなくみた。白い飯の上に細い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.